ご卒業 おめでとうございます

『人と自分との間』

理事長　湯川　彌壽善

本学に学び、卒業を迎えられた皆さんに、心よりお祝いを申し上げます。おめでとうございます。皆さん方一人ひとりが、こうして卒業を迎えられたことを、一緒に喜び合いたいと思います。

色々な形で触れられることも多いと思いますが、皆さん方が本学で過ごされた三年間は、コロナ禍と共にありました。この現実に対し、皆さん方へ簡単に言葉をかけることは、ためらわれるように感じます。たぶん出来ることは、コロナ禍の環境で高校生活を送られた皆さん方の、行く末と未来を祈ることだけです。

さて、コロナの一方、今はまたネットの世界には、毎日たくさんのニュースが溢れています。例えば、大河ドラマで主役を張った役者さんの人柄について、共演者が寄せたコメントを紹介するといったことが、ニュースとして成立します。皆がそういうことを知りたがる、という傾向があるから、それが記事として流されるのでしょう。

普通は世間一般に知られることのない、その役者さんの心遣いとか、回りの人たちへの気遣いを讃辞するような、そんな内容が多いようです。その役者さんの短所を記事にすれば、単なる悪口ですが、「実はこんな人なんですよ」と讃えるパターンが記事の主流なのだとすれば、それは人格というものが、人にとって大切なこととして、皆の関心事になっていることの現れかも知れません。

確かに私たちの身近な人たちの間でも、人格のことは、問題になります。例えばある若い女性が、交際相手の日常の姿に、「人を軽く見る」振る舞いが見え隠れすることに失望感を抱いている、といった話を聞かされたことがあります。これは単に、相性が合う・合わないの問題ではないようです。人格の中身が、互いの人間関係の土台部分に、決定的な影響を及ぼしているように、感じさせられるのです。好かれるか、受け入れてもらえるか、というのは表面的なことであって、人格というものが大切で大きな問題である、とされることには、もっと深い意味があるのかも知れません。

本学では、定められた通常の勉学と共に、〝心を磨(みが)く〟ということを折々に大切に考えてまいりました。皆さんも本学での学園生活を通して、そのことを肌で感じられたかも知れません。

ひと言で言い表すのは難しいのですが、一例として、自分が病気になり治った、とします。「嬉しい」「良かった」と思うでしょう。でも、回りにはまだ治ってない人もいるとします。その時、自分は治ったからもう人のことは知らない、といった心を出さないで、まだ苦しんでいる人のことを思い、助ける自分になりたいと考える。まずは、そんなふうに思えることが、人格を豊かにする出発点のように感じます。

冒頭、「コロナ禍の影響を受けた皆さん方の、行く末と未来を祈りたい」と申しました。これは、十分でなくとも、皆さんのことを祈れる自分でありたい、と願っているところから発するものです。同じようにコロナの影響を受けた仲間の今後を、互いに思いやれる皆さん方の心で、今日の卒業式が飾られることをまた願っております。そのことをお伝えして、皆さん方を送る言葉といたします。

「コロナを乗り越え、希望ある未来へ」

校　長　武田　充広

春寒もようやく緩み、春の到来を感じさせる今日のよき日、学校法人関西金光学園金光藤蔭高等学校での三年間の学びを終え、それぞれの道へと進んでいく卒業生のみなさん、卒業おめでとう。

この学年のみなさんは、中学卒業を間近に控えた三年前の冬、未知の新型コロナウイルスが出現し、学校生活が一変しました。瞬く間に世界中に拡大し、WHOがパンデミックを宣言。日本でも、異例の「緊急事態宣言」が発出され、戦後長らく危機管理の薄れていた国内に不安と動揺が広まりました。その混乱の渦中で入学式を迎え、高校生活が「休校」からはじまる事態に見舞われました。勿論、本校だけではなく日本全国そのような事態に陥ったわけですが、学校に通えない、会社にも行けない、お店が休業したり、イベントや人の集まりも中止・禁止されたりと、このウイルスはこれまでの日常生活を一変させることになりました。幾度となく感染爆発の波を繰り返したこの三年間の中で高校生活を過ごしたみなさんは、何を失い、何を得ることができたでしょうか。学校へ通う時間、学習する時間、クラブ活動の時間、行事に費やす時間や仲間と過ごす時間、それらの多くが失われたり、短縮されたり、簡素化されたりしました。これまで当たり前だったことがそうでなくなった時、我々も有効な解決策を見出せず、十分な教育活動ができないことに無力感を感じずにはいられませんでした。しかしながら、時間は戻せません。失われた時間も、過ぎ去った時間も、これから刻まれる時間も、どう使うかにかかっています。この三年間は、少し体調に変化を感じたり、周囲で何かあれば休むことが認められてきました。それが習慣化し、コロナ禍に学生生活を送った人たちは、忍耐力や競争力に欠けるのではないかと危惧する声もあるようです。今後もコロナウイルスとの戦いは続きます。社会の常識や慣習も変化します。しかし、いかなる環境においても、前向きな強い気持ちをもって、コロナを乗り越え、世間の荒波にも負けない人生を切り拓いてほしいと願っています。

話は変わって、サッカーワールドカップ二〇二二年カタール大会では多くの教訓が得られました。日本は優勝経験のあるドイツ・スペインといった強豪国を撃破し、大旋風を巻き起こしました。森保監督以下、日本チームへの多くの賛辞とともに、ピッチ外での選手・スタッフ・サポーターの行動が大いに注目され、世界中で称賛を浴びました。

アメリカでリーダーシップに関する書籍を手がけている作家のブライアン＝ドッツ氏は、その運営するサイトで、「W杯で日本ファンの『心地よい衝撃』から学ぶ七つのリーダーシップ」という見出しで以下のような考察を発表しました。

「日本のファングループは暴動を起こさない。建物を壊したり、パトカーに火をつけたりはしない。街も荒らさない。なんと日本のファンはゴミ袋を持ってスタジアムを綺麗にしたのだ。衝撃的だ！」と記しています。

さらに代表チームに対しても、「日本のファンだけに限った話ではない。選手たちは、ロッカールームを綺麗に掃除していた。これも衝撃的。まるで犯罪現場を綺麗にしたようだ。」と清掃されたロッカールームのツイート写真を引用して絶賛しました。そして、これらの事実を受けてこう結論付けています。

日本（日本人）の、

(1)優れた文化

(2)他人に期待しない（自分のことは自分で）

(3)細部への注意

(4)高い人格と行動力

(5)他者への貢献

(6)健全なプライド

(7)才能を必要としないという七つのリーダーシップを挙げています。

このように、日本で古くから受け継がれてきた、文化や習慣に根差した崇高な精神が、世界で認められる結果となりました。これからより複雑な社会を生きていくうえで、誰からも信頼されることが重要となります。特別な能力がなくても実践できる人生の指針として、心に留めておいてください。

最後に、卒業生のみなさん、ご家族のみなさん、金光藤蔭に関わる全ての人々の健康と弥栄を祈念するとともに、卒業生の栄えある前途を祝して贈る言葉とします。